

刊行にあたって

田中 聡 (立命館大学国際平和ミュージアム副館長)

第二次世界大戦終結から70年目にあつた昨年、数千万人に及ぶ未曾有の死者を生み出し、世界の様相を一変させた前の大戦について、さまざまな立場から振り返る催しが各地で開かれ、またその記憶を後世に残し、教訓とするための書籍やドキュメンタリーが数多く制作されました。立命館大学国際平和ミュージアムにおいても、敗戦から現在までの日本社会の歩みを振り返る特別展「戦後を語る70のカタチ」、日本軍によるアジアへの侵略の傷跡をとらえた山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」などを行い、また関連企画として林博史氏・加藤陽子氏・白井聡氏の講演会を開催して、多数の皆さんにご参加いただきました。こうした取り組みを通じ、我々は大戦をめぐるさまざまな状況や戦後の日本・アジアへの影響を再認識し、改めて「平和」の意味について考えることが出来ました。

2016年は「戦後71年目」にあたるわけですが、残念ながら戦争は決して過去の遺物とはならず、今も続いています。昨年11月にパリで起きたイスラミック・ステートによる無差別テロを期に、米ロ英独の有志国連合によるシリア等への報復空爆は拡大し、内戦も相まって欧州への難民も増え続けています。こうした状況において、「平和創造の主体者をはぐくむ」ことで世界に寄与するという理念にたつ本学の平和研究の意義は増しています。

本17号は、上記講演を巻頭特集とし、以下、敗戦前後の日本軍やBC級戦犯に関する新出資料の分析や戦後の祇園祭イメージを取り上げて、市民の平和観の変容をとらえた論考、現在行われている国際的な平和教育の取り組み紹介など、戦後70年を記念するのにふさわしい、バラエティに富んだ構成となりました。

どうぞ御味読ください。